

第1回巨瀬川流域治水推進会議 議事要旨

日時：令和5年8月28日（月）14:00～15:45

場所：筑後川河川事務所 1F 第1会議室

1. 開会

2. 挨拶【筑後川河川事務所長】

- ・7月10日は、線状降水帯が発生したことに伴い、九州北部地方に計8回の「顕著な大雨に関する情報」がだされ、記録的な豪雨となった。
- ・本会議は、特に被害が大きかった巨瀬川流域で再度災害防止のために何ができるかを検証する場。
- ・本会議では、1つ目にあらゆる関係者が自分でできることに取り組む「流域治水」、2つ目に被害が起こってからの回復力を持った地域に「強靱化、レジリエンス（強くしてしなやかに）」という2つの視点で進めていき、より良い地域になるよう議論していく。
- ・短期的な取り組み、中長期的な取り組みをしっかりとまとめていきたい。
- ・「流域治水」の取り組みとして多岐にわたる関係機関のご協力をうけ対応。
- ・九州大学の小松先生に学識経験者として知見を頂きながら進める。

3. 講話「近年何故久留米市周辺に豪雨災害が集中するのか？」

【九州大学名誉教授 小松利光氏】

- ・近年、久留米市周辺（筑後川流域）で豪雨災害が頻発（直近の6年間で5年6回）している要因は、日本周辺の海面水温の上昇、筑後川流域下流部の位置・地形条件等にあり、今後は豪雨災害が更に頻発化する可能性が高い。
- ・筑後川は日本でも一番西の端に位置する九州の西部にあり、筑後川流域下流部の地形は嘉瀬川・六角川・矢部川の各下流部と合わせると、山（分水嶺）に囲まれ西側のみ開いたボックス型をなしており、そこに耳納連山が突き出している。そのため水蒸気を大量に含む西風がこのボックス内に入り込みやすく、この突き出し部（耳納連山）に当たることでその周辺に豪雨をもたらす。西九州の中でも筑後川流域は最もリスクが高く、今後は本当に一刻の猶予もない状況と認識。

4. 巨瀬川流域治水推進会議について

- ・事務局より会議の目的・規約等について説明し、目標について認識を関係者で共有。
- ・規約（案）については了承。

5. 巨瀬川流域の被災状況

- ・7/10 出水における出水被害について、久留米市、うきは市、福岡県、筑後川河川事務所より説明がなされ、巨瀬川流域の出水状況を関係者で共有。
- ・うきは市の資料 P1 雨量図の赤い楕円は、線状降水帯の発生箇所を示しており、雨量図の強雨域と若干ずれているのは、線状降水帯の解析時から時間が経過し強雨域が移動したため。
- ・藤波ダムについて、ダム直下流の区間について効果があったと考えているが、下流部でのピーク時間における効果等は解析していないのでわからない。
藤波ダムでも事前放流を行うようしているが、今回出水では、予測雨量が事前放流実施の基準以下だったため事前放流には、至らなかった。事前放流を行い、事前に水位を下げしておくことで更なる効果は期待できる。
- ・久留米市、うきは市、福岡県、筑後川河川事務所、水害だけでなく土砂災害等の被害等の内容を協力して整理し、今後の地域づくりについても意見を伺い、治水対策をしっかりと議論していく。

6. 今後の進め方について

- ・迅速かつ短期間で治水対策の議論を進めていきたい旨を説明。
- ・第2回、第3回会議は、議論の内容を踏まえ非公開とし、第4週の月曜日開催予定。
- ・第2回は、9月25日（月）に実施する。

7. 閉会

以上